

第101回全国高校サッカー選手権大会千葉県大会総評

令和4年10月8日から11月12日の日程で第101回全国高校サッカー選手権大会千葉県大会決勝トーナメントが行われた。真夏の酷暑を避けるため、今年度から大会形式や開催時期が変わった。先に行われた一次トーナメント（6月18日～26、73チームによる2日間開催のトーナメント方式）、二次トーナメント（9月4日～11日、72チームによる2日間開催のトーナメント方式）の結果を踏まえ、44チームが千葉県代表の1枠をかけてトーナメント方式で試合を行った。

ベスト4は、日体大柏、市立船橋、習志野、中央学院の4校で、準決勝がゼットエーオリプリスタジアム、決勝がフクダ電子アリーナにて行われ、優勝は日体大柏、準優勝は市立船橋という結果になり、高校サッカー選手権大会千葉県大会の幕が閉じた。日体大柏は、初優勝で12月28日に開幕戦を迎える全国高等学校サッカー選手権大会への切符を掴んだ。

この大会後も各カテゴリーのリーグ戦が控えているが、高校3年間の集大成の大会と位置付ける選手やチームも多く、個人能力、チーム戦術だけでなく気迫や執念といったものも見られた。

攻撃では、シンプルに前線にボールを配球し、相手DFラインを押し下げていき、起点を作ろうとするチームや、ドリブルや2～3人のグループの連係によって相手を動かし、ほころびを探していくことを基本としていたチーム、相手のシステムによってスペースがしやすいエリアを使うチーム、サポートの距離を近くして局面で数的優位を作るチーム等があった。各チームの様々なコンセプトで、攻撃のきっかけの作り方を持ち、特徴を活かそうとする意図を感じることができた。

守備では、マークを外そうとする攻撃側に対し、前線から連動してシステムを変えてマークを捕まえやすくしたり、プレス開始ラインを変えて対応したりする駆け引きが見られた。前線の選手の誘導や追い込み方、守備のスイッチを入れるタイミングやエリア等、各チームの狙いを落とし込んでいた。また、ゴールに直結するロングパスやセカンドボールの攻防を得意とするチームに対し、同じようにロングパスやセカンドボールの攻防で応戦する戦い方や自陣まで引いて守備を固めて応戦する戦い方、自チームのスタイルを崩さず主導権を取ろうとする戦い方が見られた。

今大会では、スピードやドリブルでの仕掛けが武器となるチームや選手が目立った。日体大柏の古谷、市立船橋の郡司、中央学院の高橋など、チームの攻撃にアクセントを加える選手やチームの攻撃の形を担う選手もいた。今後も個の特徴を持った選手が出てくることを期待する。また所属リーグのカテゴリーや順位が結果にそのまま反映しないことが多かったように思う。どのチームも止めて、蹴る、運ぶなどの個人の能力は数年前に比べると確実に上がり、守備がしっかりと整備され、相手の攻撃を粘り強く封じ、鋭いカウンターを繰り出せることやセットプレーで得点チャンスを作る準備ができているチームが多くなっていると感じた。特に、県2部リーグを戦う中央学院は持ち前の個人の技術に加え、

相手の強度の高いプレスに屈することなく、プレーすることができ、所属リーグの
カテゴリーに差があっても堂々戦えることを証明した。今後も各チームが様々な
コンセプトを持ち、切磋琢磨していくことで千葉県の高校サッカーがレベルアップして
いくことを期待する。

最後にこの大会は会場や審判、役員など多くの方々の協力によって無事に終わることが
できた。大会運営に携わっていただいた全ての方に感謝の意を表すとともに、初出場の
日体大柏の全国での活躍を期待し、総評とさせていただく。

千葉県立白井高等学校

唐澤 貴人